

Title	「うそ」について(一): 「うそ」の現象的分析のために
Sub Title	Über die Lüge (1) : Zur phänomenologischen Analyse der Lüge
Author	西谷, 謙堂(Nishitani, Kendo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1958
Jtitle	哲學 No.35 (1958. 11) ,p.389- 402
JaLC DOI	
Abstract	(1) Die Begriffsbestimmung der Lüge. Die Lüge ist schon von dem griechisch-romischen Zeitalter an bis heute unter verschiedenen Gesichtspunkten betrachtet werden. Hier soll die Lüge hauptsächlich psychologisch betrachtet werden. Nach Otto Lipmanns Begriffsbestimmung versuche ich die Lüge als eine willensmassige Erfolgshandlung zu definieren. Willensmassige Erfolgshandlungen sind solche Handlungen, bei denen sich zwischen die Zielvorstellung und ihre Realisation irgendwelche hemmende Zwischenglieder einschieben. Daher ist es das wesentliche Merkmal, dass der Aussagende sich bewusst über irgendwelche Hemmungen hinwegsetzt, unter der Gesichtsmaske etwas ausspricht, um ein bestimmtes von ihm vorgestelltes Ziel zu erreichen. Anderenfalls handelt es sich eben nicht um Lüge, sondern um Irrtum im allgemeinen. (2) Stellung der Fragen. Da die Lüge eine soziale Erscheinung ist, sei sie mit der Formel Shoarr;S (S=Subjekt) umschrieben. Die erste Frage ist nun, wie sich die Lüge darstellt, je nach der Phase, wenn man die Lüge in soziale, asoziale und antisoziale Lüge einteilt. Dann mochte ich die weitere Frage stellen, ob die Lüge von den Beziehungsformen zwischen dem Aussagenden und den anderen Personen, d. i. von Gemeinschaft oder Gesellschaft beeinflusst wird oder nicht, und die ob der Mensch je nach den Situationen einmal lüge, einmal nicht, oder die ob bestimmte Menschen immer, lügen, andere dagegen nie lügen, also von den Situationen nicht dazu bewegt werden. Die zweite Frage wird zu der weiteren Frage führen, wie diese Art von Persönlichkeiten denn beschaffen seien. Nunmehr mochte ich auf Grund des Materials auf diese Fragen Schritt für Schritt antworten.
Notes	III 教育,慶應義塾創立百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000035-0394

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「うそ」について (一)

——「うそ」の現象的分析のために——

西 谷 謙 堂

(一) 「うそ」の概念

「うそ」の現象は、已にギリシア時代から種々の領域特に倫理学、教育学及び心理学に於て広く考察の対象となつて⁽¹⁾いる。教育の理論及び実践が、常に「うそ」を深刻に取扱つてゐることは自明のことである。私はいまここでは主として、「うそ」を心理学的視座から考察したいと思う。

一般に人々は、真実と一致しないすべての供述に対し、極めて無雑作に「うそ」のレッテルを貼り勝ちである。これは特に児童や青年に対する両親及び教師の態度についていえることである。

しかし心理学的に分析する時、われわれは真実と一致しない供述を、すべて「うそ」と断定するわけにゆかず、その中には幾多の「みかけのうそ」即ち他の観点からみるとときには、「うそ」といえるにしても、心理学的には「うそ」といえない幾多の「うそ」が含まれてゐることを認めざるを得ないであろう。

「うそ」について (一)

いま Otto Lipmann に従って、「うそ」を意志的結果招来行為⁽²⁾ (eine willensmäßige Erfolgshandlung) と定義して進みたい。意志的結果招来行為というのは、目的表象とその実現との間に、抑制的中項が挿入されることころの結果招来行為である。このように考えると、「うそ」の特徴は、「うそ」を供述する人が、その心の中に思っている一定の目的を達成するために、抑制的中項を意識的に無視する、いわばマスクをかぶって供述するということである。従って抑制的中項が存在していない場合には、「うそ」は存在しないということになる。抑制的中項には色々ある。

偽の表象複合 F を言語的に表現することに対する抑制的中項は、F と同時にその心の中に存在している、自分の考えでの真の表象複合 W である。而して W と F との間の葛藤にあたり、F が発現しようとする傾向は、その発現と結びついている目的表象によって強化されるが、他面に於ては、望ましくない結果の表象特に「うそ」があるいは発見されるかも知れないという表象によって抑制を受けることもある。更に「うそ」と結びついている不快の感情が、抑制的に作用することもあろう。これは「うそ」を供述しようとする人の心の中に、「うそ」の供述を抑制する道徳的規範が、まざまざと思ひ浮べられている徴候であらう。

ところで、いま述べた如く「うそ」の必須の条件は、供述の対象となつている事態 F 及び F と異なる事態 W の両者が、供述者の心の中に共在しているということであり、もしそうでなければ、如何なる供述も「うそ」とは、いわれずして、ただ「錯誤」といわれるべきであらう。供述者が真実を供述しようとする最高の意志をもつていても、錯誤に陥ることが屢々あらう。これは W. Stern によって刺激された「供述の心理学」的研究によって明かにされている。⁽³⁾

更にWとFの二種類の表象複合が共在していながら、しかもなお「うそ」といえない事例の一つは、われわれが平生用いている「慣習的なうそ」である。他人の意を迎えるために、Wとは異なるF所謂儀礼的の供述例えお世辞をいうが如きは、「慣習的なうそ」に入るであろう。この種の「うそ」は、Lipmannがいうように、抑々の始めに於ては、意識的な「うそ」であって、他人を不快ならしめないと同時に、自分をも不快ならしめない意図から出たものであったであろうが、時の経過と共に逐次その本来の意味内容を脱皮して、単なる慣習的な表現形式に変じ、Fと異なる内的態度Wによって、何等の抑制をも受けないものとなってしまっている。

意識的に偽Fを供述しているが、しかもなお「うそ」といえないもう一つの例として、所謂各種の作話の創作を挙げることができよう。作話の語り手は、表象複合Wを無視して、Wとは無関係な表象複合Fを描写する、換言すれば、供述はWが全く存在しないかの如くにすすめられてゆく。しかし語り手は相手を欺く意図によって語りつぐのではなく、その主観的内容Fの中へ相手をしばらく引入れ、この内容を客観化しようとする意図によって語りつぐのである。ここに於ては、たしかにWがFのために意識外に追放されているが、しかしこの過程は、いままで「うそ」の特徴として挙げた抑制を克服する過程と同一と見做すことはできまい。即ち「うそ」に於ては、Fの発現は、Wの発現傾向の圧力下にあることが明瞭に意識されていて、しかもWが克服されるのである。ところが作話の創作に於ては、Wが一度にして完全に克服され、Fに置換えられてしまっているので、最早克服する必要がないのである。

なお作話と部分的に関係のある社交的会話に於ける無邪気な法螺から、純粹な文学的作品へ、あるいは映画への間断なき移行行きが考えられるであろう。すべてこれらの表現内容は、いわば審美的な方向をとっているとい

える。したがって、その内容は客観的な事実報道の形式をもっているにしても、あるいは主観的な自我形式をもっているにしても、必ずしも真実が求められていない。ただしその程度が、病的にまですすむ場合には、虚言症 (Pseudologia phantastica) に至るかも知れない。虚言症を内的に指導するのは、供述の内容を相手に信ぜしめようとする意図ではないだろうし、またその心の中には、何等の抑制も存在していないであろう。⁽⁵⁾

真Wの事態が審美的な意図から追放されるのみでなく、これと別箇な意図からも追放されるという教訓的な一例は、児童心理学に求められるであろう。例えばいたずらをして、それを想い起すことが不快な子供は、屢々成人の不手際な質問によって、Wの事態をFの事態に置き換えてしまうことがある。その際のFの内容は、子供がその場面に於て如何に振舞いたかったか、あるいはその場面が自己の希望に応じて、如何に展開して欲しかったかというような希望の契機を含んでいるであろう。

いま述べた例に類似している現象は、暗示特に権威的暗示による現象であろう。問者がそれについて権威をもっていると感じている場合には、答者は問者の暗示によって、Wの代りにFを答えてしまうのである。この暗示の産物としての「うそ」は、供述者が、確信を以てWをFの陰に追放し、すべての抑制から解放され、まくじきにFを供述する事例に似ている。この場合にも供述者の心の中に、抑制的中項が存在していないので、「うそ」と断定することはできないであろう。

以上「うそ」といわれている現象を、心理学的に分析したのであるが、自分が真と信じている事態Wを追放し、それと異なる事態Fを意図的に、他に真Wと信じさせる場合に、供述者は他に対して「うそ」を供述しているということができるし、また彼は実際に「うそ」の体験をもつであろう。

しかし供述者が偽Fを供述する場合、供述者が果たして、真Wを意識的に追放して、Fを供述しているのか、あるいはWとの葛藤なしにFを供述しているのかを何によって弁別し得るであろうか。WとFとの間に葛藤があるか否かは、純粹に「心の内の生活」(主観的体験)に属することであるか、それともそれには何等か客観的に認知しうる徴候があるであろうかが問題である。

Reininger の言を俟つまでもなく、「うそ」と「うそのみかけ」及び「うその前階」とを明別することは、多くの場合非常に困難であろうし、また全く外部からは不可能ですらある場合もあろう。しかし従来「うそ」を客観的に認知あるいは発見する方法が考えられている。「うそ」の供述に伴う、赤面、蒼白、落着きの喪失、口ごもり等の表情や態度の変化は別として、聯想検査、呼吸や脈搏の変動或は皮膚電気反応等による「うそ」認知の方法を挙げる事ができよう。

これらの方法は、それぞれ多かれ少なかれ、内的葛藤の有無を示唆するであろう。これらの方法の発展が期待されるが、更にこれらとは別な方法も案出されうるであろう。

- (1) Otto Lipmann und Paul Plaut: Die Lüge (1927) には、多数の執筆者による論文が集められている。
- (2) Otto Lipmann: Zur Psychologie der Lüge(in)Otto Lipmann und Paul Plaut: Die Lüge.
- (3) Clara und William Stern: Erinnerung, Aussage und Lüge (1931).
- (5) 杉田直樹著「小精神病学」によれば、「追想の欠陥を空想で補い、しかも自分ではそれを真実の追想だと信じているものがある。これを虚談症又は作話症という」とある。
- (6) Karl Reininger: Die Lüge beim Kind und beim Jugendlichen als psychologisches und pädagogisches Problem
(in) Otto Lipmann und Paul Plaut: Die Lüge.

(二) 「うそ」の発生

「うそ」といわれる現象は、動物界にも認められるであろう。⁽¹⁾ 勿論それは、動物の客観的徴候を媒介として観察せざるを得ないことはいうまでもない。しかし動物界に於ける「うそ」は、反射の連鎖あるいは本能的行動とみらるべきもので、生物学的に極めて有意味にして合目的である。というのは動物がなすところの欺瞞は、追跡者からのある程度の安全の保証を与えるか、あるいは攻撃者がその餌食動物によって適當の時まで発見されないように欺くことができるからである。前者は防護的欺瞞と、後者は攻撃的欺瞞と呼ぶことができる。しかしその際動物の内部には欺瞞の意図乃至意識は、存在せず、況や真と偽との間の葛藤は存在していないであろう。従って動物の「うそ」は、「うそ」ということはできない。

次に人間に眼を転じ、「うそ」を発生的に考えてみよう。この場合発達を三つの段階に分けることが適當である。第一段階の初期に於ける行動は、無意識的、衝動的であるので、所謂「うそ」が現れても、それは動物に認められるものと比較しうるような形式と見做すことができよう。言葉を通信手段として用いるようになっても（第一声の発現には、広い個人差はあるが、第一声は生後八ヵ月以後に発現するとされている）、その知覚は不正確且つ観相的であり、記憶もなお薄弱で、表現能力も限られている。一歳の子供の記憶は、特に印象的な経験の場合にも、数日以上にはさかのぼり得ないようである。特に場所の定位と時間の定位が困難であるために、別々に経験したことを一緒に経験したものとして思い起されることもあるので、子供は成人の暗示的な質問によって特定

の方向への答に容易に導かれ易い。更に空想と現実、真と偽との識別が非常に困難であることが一般に見出されている。故にこの段階の子供が、真Wと異なる偽Fを供述しているにしても、知覚の不正確、観相的知覚や記憶の誤りに基くこともあろうし、暗示の産物であることもあろうし、表現能力の不十分の結果であるかも知れない。あるいは希望的な構え及び情緒的構えによって、その本来の体験を特定の方向へ着色することも考えられる。これは思春期に於てすら見出されることがあろう。更には作話創作の興味の産物が、供述されることもあろう。作話創作は、子供の表現欲に基くものと考えられる。この欲求の満足は、子供に機能の喜びを考える。子供は言葉を遊戯的に結合する。しかしてその材料が石であろうと木片であろうと動物であろうと事実であろうとそれは間うところではない。このような空想が一部体験を含んでいる場合には、事情によっては、それを聞く人の心の中に、「うそ」の印象を惹起すであろう。

しかしその供述は、多くの場合子供の心の中に於ける真Wと偽Fとの葛藤によって、Wを意識的に追放した上での供述と考えることはできない。故にその「うそ」は、「うそ」ではなくして、「みかけのうそ」と呼ぶのが適當であろう。

第二の段階は第一段階の種々の特質を脱皮して、空想と現実、真と偽とを識別しうる段階である。

第三の段階は、第二の段階の特質に加えて、倫理的価値が認識される段階である。

智慧の木の第一の実⁽²⁾は、真と偽とを識別せしめ、第二の実は善と悪の智慧を取次ぎ、次に真は善に、偽は悪に属せしめられる。これらの段階を経過した後⁽²⁾に現われる「うそ」の中にこそ、「うそ」が含まれているであろう。というのは、供述者は、真(善)に対して偽(悪)を選択することが可能であるからである。

- (1) Friedrich Alverdes: Täuschung und Lüge im Tierreich.
- (2) Otto Lipmann: a. a. O.

(三) 一つの課題

(一)に於て「うそ」の概念規定を試み、(二)に於ては、如何なる発達段階に於てあらわれる「うそ」が、(一)に於て規定された意味での「うそ」として認められうるかについて考察した。

しかし(一)の末尾に於て、触れておいたように、ある方法を用いてすら、「うそ」を「うそのみかけ」及び「うその前階」から明確に区別することは、極めて困難である。多くの場合、一般には内的葛藤の契機があるか否かを認知することは、外部からの観察によつては不可能であろう。また内的葛藤の意識にも程度の差がある。こういうように考えてくると、「うそのみかけ」から「うそ」への過渡的形式を考えなければならぬのではなからうか。

ところで「うそ」の現象に関する心理学的な調査は、従来多数行われている。それらの調査の中で、先ず筆者の関心をひいている一つは、Reiningerの「児童及び青年に於けるうそ」⁽¹⁾である。Dupratは「うそ」を従来主として行われていたように、道德哲学的に把えずして、社会心理学的に把えるべきだと主張したが、Ch. Bühlerは、うその現象的分析を更にすすめて、「うそ」を社会的なうそ、非社会的なうそ及び反社会的なうその三種類に大別している。⁽²⁾

次で Reininger は Ch. Bühler の分類を採用し、児童及び青年についての調査を資料として、(一)社会的なうそ、(二)過渡的形式として(1)拡大された自我のためのうそ、(2)慣習的なうそ、(三)非社会的なうそ、(四)過渡的な形式として(1)義務の履行を怠った後のうそ、(2)官憲に対するうそ、(三)反社会的なうその五種類に分類して、それらが環境、年齢、性と如何に關係するかを調査している。

いうまでもなく「うそ」は、多くの場合、社会的現象即ち人と人との間にあらわれる現象である。この關係は $S_1 \uparrow \downarrow S_2$ の形で現わすことができよう。自己欺瞞は $S_1 \uparrow \downarrow S_1$ の形で現わされるであろう。

筆者は目下この見地に立って、調査をすすめている。小学校五年から高等学校三年までの児童及び青年に、「人がどうしても、つかなければならないようなうそ」と「うそをついたあとと氣持」という題で、作文を綴らせ、その資料を(一)社会的なうそ、(二)非社会的なうそ及び(三)反社会的なうその三種の規準によって整理する。社会的なうそには、いくつかの形式が含まれると思われるが、それは結局他人を助けたり、不快を免れしめるためのうそ或は自己の利益を犠牲にするか、あるいは自己の不利益を意識的にまたよるこんで甘受しつつ、他人を助けるための「うそ」であり、反社会的なうそは、これと正反対の態度から生れるもので、相手に意識的に害を加えるようなうそである。これらの二形式の間に、Ch. Bühler のいうところの非社会的なうそが挿入されるが、これは相手の利益に積極的にも消極的にも影響を与えることのない、いわば社会的に無関心なものである。しかしてこのうその形式の特質は、専らうそをつく人の自我を顧慮するという点にある。

これら三形式のうそが、発達の如何なる経過を辿ってゆくか、更にある特定の発達段階例えば思春期を中心として顕著な特徴を示すか、またそれらは児童及び青年の生育環境、男女両性及びその他の点に於て何等かの差

異を示すか等について調査すると共に、児童及び青年が自己のうそに対して、如何なる態度を示すかも調査することになっている。ただこの調査は、Successive cross-sectional approach によっているが、できうる限り、発達の経過に重点を置いて考察してゆく。

なお Lipmann は、供述者と相手との関係の形式を取上げて次の如くいっている。⁽⁹⁾「真実への要求権は、供述者が Gemeinschaft の関係にあるものと自覚している人々にのみ承認され、真実性の義務は、供述者が Gemeinschaft の関係にあると自覚している人々にのみ承認される。……この条件が充たされている人々に対してのみ、意識的な不真実な供述は、抑制の感情と結びつく。不時の正体暴露の表象中にある抑制を離れてみれば、敵を欺くことは抑制を受けずに行われる。これは心理学には、「うそ」ではない。共同意識 (Gemeinschaftsbewusstsein) の前提が欠如している場合には、商売敵、顧客、官憲 (警察官、税務官吏、税関吏)、教師及び両親を欺くことが行われる。」

たしかに Lipmann のいうように、真を供述するか、あるいは偽を供述するかは、供述者と相手との人間関係によって、影響されることが非常に大きいと思われる。しかし両者が Gemeinschaft の関係にある場合即ち両者が相互に Gemeinschaftsbewusstsein をもっている場合にのみ、真が供述され、そうでない場合には、常に偽が供述されるであろうか。

あるいは真を供述するか偽を供述するかは、各人のおかれる刺激場面の種類によって左右されるであろうか。あるいはまた真偽何れかの供述は、周囲のあらゆる刺激をして、機能的に等価的たらしめる内的なあるものによって、首尾一貫しているであろうか。

H. Hartshorne と May. M. 等は文化的背景、社会的・経済的背景、智能程度を異にする約一万一千名の児童が、各種の実験場面に於て如何に行動するかを調査した。⁽⁴⁾ その実験場面には、試験の際不正を行う機会、小箱からおかねをぬすむとる機会、運動競技の記録を伴る機会、両眼を閉じる競技に於て盗見る機会等が含まれていた。而して、児童は他の人々によって発見される恐れが、全くないと思われる状況下に於て、これらの機会を利用することができたのである。その主なる結果をあげると次の通りである。(1) 年長児童は年少児童よりも、僅かながら欺瞞的であり、(2) 検査の若干のものに於ては性差が現われたが、一般的には著しい性差はなかった。(3) 智能水準の高い児童は、その低い児童よりも欺瞞すること少なく、(4) 暗示を受け易い児童は、暗示をあまり受けない児童よりも欺瞞への大きな傾向を示したが、正直と身体的条件との間には、特別な関係はなかった。(5) 正直の水準は、友達同志の間に於て類似する傾向をもつ、(6) 正直は家庭の社会経済的・文化的水準と高い相関関係をもつ、(7) 同一あるいは非常に類似している検査間の得点の類似度は、非常に高いが、検査場面が異なるに従って類似度は低くなる。即ちあるテストに於て不正をする子供も、自分のものでないおかねをとることもあるし、とらないこともあることを見出した。これらの結果に基いて、Hartshorne 等は、正直の行為は、児童がおかれる場面と独立に働く内的なものによって、モティヴェートされるものではなく、場面が類似している程度に比例して、種々の場面に於て類似的行動をとるという意味に於て、場面のファンクションであるといっている。

成程 Hartshorne 等は児童の反応が一貫性を欠き、容易に予想されないことを主張しているが、しかし児童が成長し、社会的慣習及び標準を認識するに従って、逐次統合した行動をとるようになることを認めている。

これに対して L. P. Thorpe は、子供自身の立場及び道徳的に無関係な適応機構の角度からみれば、児童の行

動は矛盾していないといえ、R. S. Woodworth は、たとえある時に不正を行い、ある時に不正を行わないとしても、あるいはある時には外向的に、ある時には内向的に行動するにしても、自己矛盾はしていないかも知れないといっている。⁽⁵⁾

なお A. T. Jersild も、次のようにいつている。Hartshorne の調査に於けるテストの際の不正が、偶然に行われるという風に、解釈さるべきではない。ある児童が不正を行う場合には、その行動を誘発する動機があるろう。即ちその児童の心の中には、何か危機的なもの、欲望あるいは目的が存在しているであろう。ある刺激場面はどんな手段を講じても、成功を勝ち得ようとする要求を誘発するかも知れないが、他の刺激場面はそうでないかも知れない。もし A が B の競争相手の場合には、B も一緒に受けている数学の試験では不正を行うかも知れないが、B が欠席する場合には、同じ程度の成功欲と不正を行おうとする同じ程度の動機をもたないかも知れない。またある児童にとっては、自己の要求から学業に於て勝つことは非常に重要であるかも知れないが、運動競技に於て勝利をおさめることは、それ程重要でないかも知れない。そこでその児童は、前者に於ては不正を行うかも知れないが、後者に於ては不正を行わないかも知れない。そこでその行動を外面的場面の立場からみる場合には、ある児童が首尾一貫した不正への傾向をもっていないようにみえるかも知れないが、その動機に照らしてみる場合には、不正あるいは正直の傾向は首尾一貫しているかも知れない。⁽⁶⁾

あるいは又各人をして、統一的行動をとらしめる生得的な決定者があるというようなことは、全くあり得ないであろうか。

これまで述べて来たように真あるいは偽の供述（行動）は、人間関係の形式によって決定されるか、あるいは

外的刺激場面の種類によって動揺するか、あるいは又それらとは全く独立に、各人に内在するあるものによって指導されるであろうか。この問題は、*trait psychology* の問題と結びつくであろう。

筆者はここに一つの課題を出見し、而して先に述べたように、先ず児童及び青年の「うそ」についての意図をさぐり、次に種々の刺激場面を設定し（筆者が行った一調査も、これに入る）、各場面に於て彼等が表出する「うそ」の供述あるいは行為を、年齢段階差（発達）、性差、環境差、個人差（智能、学業成績、性格等）の観点から検討し、更にケース・スタディによって、児童及び青年の「心の中の生活」（体験）へ入って、「うそ」の現象の理解に一步づつ接近したいと計画し、その計画の一部を実施中である。

(1) Karl Reininger: a. a. O.

(2) 註(一)による。

(3) Otto Lipmann: a. a. O.

なお本文に於て述べられている考案に基いて、Lipmann は次のように主張している「成程処罰によって *Lügen* だけは克服されよう。というのは、処罰は *Lügner* の心の中に、*Lüge* の結果に対する恐怖を生み出すから。しかし処罰によつて *Lügenhaftigkeit* は克服され得ない。というのは、如何なる処罰と雖も、欠損している *Gemeinschaftsbewusstsein* を建て直すには、不適當であるから。すべての処罰は、*Lügner* と *Belogen* とを切断している間隙を、ただ大きくするだけである」と。

更に Lipmann は *Wahrhaftigkeit* への教育を提案して次の如くいう。「*Wahrhaftigkeit* への教育が第一になさねばならぬことは、心理学的に、*Lügner* をつて、*Lügner* ならしめないとこの *Hemmung* をつくり出すこと即ち *Lügner* の心の中に、*Familiengemeinschaft* によつて両親と、*Schulgemeinschaft* によつて教師と、官庁によつて代表される国家及びすべての国民と *Lebensgemeinschaft* によつて、競争者とな *Interessengemeinschaft* によつて、それどころか敵とは、全人類を含む *Kulturgemeinschaft* によつて結びついていて、この感情が起ってくるようにす

ることである」と。

W. Stern も子供の「うそ」に対して、処罰や非難によって素人療法をせず、寧ろ予防が肝要であると忠告している。更に H. Schoeps も、試験の際に学童が時として行う不正行為を矯正する方法の一つとして、教師と児童との間に相互信頼の雰囲気をつくることを提案している。

以上の如き「うそ」の処理法は、みな適當であるかも知れないが、調査の結果を俟って改めて検討することとする。

- (4) Louis P. Thorpe: Child Psychology and Development (1946) 及び Psychological Foundations of Personality (1938) による。
- (5) Louis P. Thorpe: a. a. O.
- (6) A. T. Jersild: Child Psychology (1947).
- (7) 筆者の「学童の虚偽」『哲學』第二十三輯。